

令和7年3月17日
府中市立小柳小学校
校長 内井 利樹

令和6年度 学校経営報告

1 今年度の取組と自己評価

(1) 目指す学校像について

「Well-Being 溢れる学校」を目指して、主体的に取り組むこと全体の柱として教育活動を行った。学習指導においては、全校で学習計画を立てることができるようにすることを共通の目標として、授業づくりに取り組んだ。生活指導、特別活動などにおいても、児童発信になることを大切にしながら、教育活動を実施した。

全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「5年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか」という質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童は、前年度比で3.5ポイント上昇した。更に、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問項目に対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童は、前年度比で20.9ポイントも上昇した。

学校全体で取り組んだ成果がはっきりと表れた結果となったが、学校評価児童アンケートでは、「学校生活は楽しい」と回答している児童は前年度比で2.7ポイント減少するなど、目指す学校像に向けて、課題は残っている。

(2) 重点目標への取組と自己評価

① かしい子の育成

主体的・対話的で深い学びを具現化するために、特に「発見すること」に重点を置き、どの学年、どの教科の学習においても子供が学習の見通しをもって取り組んだり、学びを振り返ったりする授業づくりに取り組み、学ぶことに喜びを感じられるようにした。

- 子供のつぶやきを拾って課題設定し、ゴールイメージをはっきりと示した授業の導入になるようにした。
- 「分かったこと」「できるようになったこと」「感じたこと」とともに、「分からなかったこと」「まだできないこと」についても振り返らせ、自己調整力を身に付けられるようにした。
- 教科担任制を軸にした校内研究組織にして、学年の縦軸、教科の横軸で、子供が主体的に学ぶ授業づくりに取り組んだ。

学校評価の児童アンケートでは、「授業で学んだことは理解できている。」「分からなかった問題について、間違い直しをして分かってもらうなど、粘り強く取り組んでいる。」という項目について、前者は88.9%、後者は85.4%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比でそれぞれ4.5ポイント、4.2ポイント減少している。また、「友達との学び合いの中で、考えが広がったり深まったりしている。」という項目について、88.7%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これも前年度比で3.4ポイント減少している。保護者アンケートでは、「教師は基礎学力の定着を図るために努力してい

る。」「小柳小の子は、学び合いを通して、自分の考えを広げたり深めたりしている。」という項目について、前者は92.8%、後者は90.6%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これも前年度比でそれぞれ2.1ポイント、2.9ポイント減少している。(1)で示したように、子供が主体的に学ぶことについては大きな成果があったものの、知識・技能の定着や学び合いについては課題が大きく、さらなる授業改善を行い、主体的・対話的で深い学びになるようにしていきたい。

② やさしい子の育成

自分も相手も大切にするために、人権尊重の精神を基盤とした指導に取り組み、友達と一緒に活動することに喜びを感じられるようにした。

- 子供の話を傾聴し、子供の気持ちや行動を認めるように指導した。
- 学年会や夕会の時間に子供の様子を共有し、いじめや不登校の未然防止、早期発見、早期対応に努めるために組織的な対応を徹底した。

学校評価の児童アンケートでは、「いじめや仲間はずれがなく、友達と仲良く生活している。」という項目について、93.7%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で1ポイント増加している。

保護者アンケートでは、「学校はいじめや不登校をなくし、児童が温かい人間関係を築いていけるように努力している。」という項目について、94%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で2.1ポイント増加し、一昨年度比では14ポイント増加している。迅速かつ丁寧な対応を徹底していることが数値としても現れている。ただし、年間30日以上欠席している不登校傾向の児童数は14名となり、不登校の未然防止や不登校傾向児童や保護者への支援については課題が大きく、支援員の効果的な活用も含めて、さらなる取り組みが必要である。

③ 元気な子の育成

多様な運動や遊びを通して体を動かす喜びを感じさせるとともに、自分の心と体を自己調整できるようにすることに重点を置いた指導に取り組んだ。

- プロスポーツ選手を招いたりタグラグビーやボッチャの大会に出場したりと、様々な運動に触れる機会を設定し、運動への興味・関心を高めるようにした。
- 体育学習を含めた振り返りの時間に、自分の心と身体の調子を見つめさせる指導を徹底した。

学校評価の児童アンケートでは、「運動することが楽しい。」という項目について、93%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で0.7ポイント上昇している。保護者アンケートでは、「教師は体力の向上を図るとともに『体を動かすことが好きな児童』の育成に取り組んでいる。」という項目について、93.3%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で2.2ポイント、一昨年度比で9ポイント以上増加している。しかし、地域のスポーツクラブに所属するなど運動することが好きな児童と、休み時間も外に出たがらない運動することに苦手意識を感じている児童との二極化が進んでいる様子も見られる。運動することが楽しいと感じられていない児童や、運動が苦手と感じている児童への手だてを講じていくことが課題である。

④ 地域・保護者との信頼関係の構築

生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域や保護者から学ぶカリキュラムを多く設定し、地域に親しみを感じ、地域の事柄や人々を理解できるようにした。また、ホームページやスマート連絡帳を活用して、情報を積極的に発信した。特に不審者をはじめとする安全にかかわる情報を素早く流すようにした。学校評価の保護者アンケートで、「学校は児童が快適・安全に学校生活を送れる環境になっている」「学校は学校公開や学校便り、ホームページ等で、教育活動や児童の様子を適宜伝えている」という項目について、どちらも96.7%があてはまる、だいたいあてはまると答えている。前年度比で、前者は5.3ポイント、後者は0.6ポイント上昇している。

- 子供たちを地域やPTAの行事に積極的に参加させ、地域の一員である意識を高めるようにした。
 - 六中学区、九中学区の学校と連携をとり、共通理解の基で子供を育てるようにした。
 - 地域の人材を活用したり地域の環境を生かしたりしたカリキュラムを進めた。
 - 避難所開設の準備委員会を発足し、防災を中心とした地域とのつながりを進めた。
- 避難所開設を含む安全のための取組を、さらに進めていくことが課題である。

⑤ 働き方改革の推進

必要な業務、大事にしたい業務と、効率的に行えそうな業務、何かと統合できそうな業務を分類・整理した。

- 学校行事、諸会議、校内組織等の見直しをさらに進めた。
- 学校経営支援事業や副校長等校務改善事業を有効活用し、校内事務の軽減と効率化をさらに進めた。

教員の時間外勤務について、月に45時間以下の割合は67.5%であり、前年度比で10%上昇している。月に80時間以上の割合も0%となり、大幅に改善されている。しかし、時間外勤務が月に60時間程度の教員も一定数在籍しており、さらなる改善が課題である。

⑥ 全ての教育活動の基となる、教師力の向上

授業改善、不登校やいじめの発生件数の減少を大きな柱として、自分たちの指導を振り返らせ、学び合わせることで、教師力の向上を目指した。

- 学年会で、先週の授業を振り返り、よかった指導を共有させることで、学年内のOJTを進めた。
- 学年会で、月に2日以上休んでいる子供の様子や、子供同士のトラブルを共有させることで、組織で素早く対応できるようにした。
- 観察授業では各自が1学期につき15分×3回の授業参観を行い、お互いの授業のよいところを参考にできるようにさせた。

学年会だけでなく、教員同士の情報交換や共有の意識は高まっており、日常的なOJTは十分に行われている。授業を見合うことで自分の授業改善に役立てている様子も見られる。不登校傾向の子供に対するアプローチを共有したり、子供同士のトラブルに学年全体で関わって指導したりと、一定の成果が見られている。今後は、副担任制度の有効な活用も含めて、さらに組織的に取り組めるようにしていくことが課題である。

2 次年度以降の課題と対応策

(1) 自分も相手も大切にし、共につながることができる子を育てること

自分のよさや相手のよさを認識し、共に学び行動することに喜びを感じられるようにすることは最大の課題であると考え、そのために以下のことを徹底する。

- 人権尊重の精神を大切にし、学校の教育活動全体を通して多様性を認め、自己を振り返り、よりよい自己の実現を目指したり他者を尊重したりできるようにする。
- 心の天気予報や今週の Well-Being 等を有効に活用しいじめや不登校、問題行動等について未然防止に努めるとともに、発生した際には関係諸機関と連携し、迅速かつ丁寧な対応を進め、早期発見、早期対応に努める。
- 特別支援学級と通常学級の子供の交流および共同学習を推進し、お互いを思いやる心を育て、全ての子供たちが学ぶ喜びを味わい、共生社会の一員としての自覚を醸成する。
- 支援員を有効に活用し、不登校傾向の子供や特別に支援が必要な子供への支援をさらに充実させる。

(2) 課題に気付き、すすんで学習に取り組む子を育てること

主体的・対話的で深い学びを実現するために、全ての学年、全ての教科において問題解決的な授業づくりに取り組んでいく。そのために以下のことを徹底する。

- 学習計画を立て、教科や単元に応じて子供たちが学習内容や学習方法を選択したり、自らの学びを振り返り修正を図ったりするなど、主体的に問題を解決できる学習スタイルを確立する。
- タブレット端末を適切に活用し、子供に学びを委ねながら個別最適な学びを目指すと共に、ペアや小グループでの学び合い活動を重視した協働的な学びを充実させる。
- 小中連携のもと、中学校区で共通した学びの視点及び学習規律による指導を徹底する。

(3) 心身の変化に気付き、粘り強く頑張り、自分を高める子を育てること

体を動かすことに喜びを感じ、心身の健康を目指して努力できるよう支援する。そのために以下のことを徹底する。

- 運動の日常化を進め、全校及び各学級ですすんで体を鍛えるような場と機会の拡充を図り、健康な心と体づくりを推進する。
- 心と体の調子や動きを振り返る機会を適宜設定し、心や体の変化に意識を高められるようにするとともに、気持ちや体をコントロールしようとする素地を育成する。
- 近隣のプロスポーツチームを招聘し、学習を行ったり話を伺ったりする機会を設け、体を動かすことへの関心を高める。

(4) 地域・保護者との連携を進めること

地域・保護者との双方向の連携を深め、地域の中で子供を育てるようにする。そのために以下のことを徹底する。

- 全学年で地域学習を進める。特に生活科や総合的な学習の時間においては、地域の施設や環境、人材を生かした学習に取り組む。
- 地域・保護者から寄せられたアンケート調査の結果を学校の教育活動に反映させる。